

節分と春来る鬼

(せつぶんとはるくるおに)



節分の魔除け

春の節分は立春の前日で、春到来の節目の日。2月3日頃に相当します。昨今では、幼稚園などで子どもたちが鬼の面を作ってわが家に持ち帰ってきたり、スーパーなどで“鬼打ち豆セット”といった商品も販売されているので、この日「鬼は一外、福は一内」などと大声を出して、鬼やらいをするご家庭も多いことでしょう。ただ、マメガラ(大豆の枝)にイワシの頭を差し、これにヒイラギを添えたものを魔除けとし、家の入り口等々に挿し付けるといったところまでやる家は少なくなりました。「イワシの頭も信心から」という言葉の意味もすたれつつあるようです。

かつて野田市内では、この日のことをトシコシ(年越し)と呼んで、朝、大豆を煎って一升枥に入れ、いったん神棚に供えておいて、夕方になって豆まきをしたものです。特に、この鬼打ち豆については、破魔力のあるものとされる一方で、歳の数だけ食べればよいとか、福茶といってお茶に入れて飲むとよい、あるいは、焦げ具合でその年の天候や作況の占い物としたり、のちのち雷除けの呪い物(まじないもの)としたり、はては後日、初午(はつうま)のスミツカレの具として使うなど、それ自体、強烈な呪術的要素を含んでいるものでもありました。

ところで、豆まきの前までには、先ほどの“魔除け”を母屋の各所に付けておいたわけですが、それにも方法があって、イワシの頭にはツバをはきかけ、火であぶり、わざわざ臭うようにしたといいます。そうすると、魔物が寄って来ない、家の中に入って来ないなどといったのです。あるところでは、この臭いは人の臭いで、鬼はそれを人の頭だと勘違いして夢中で食べて帰っていく。そのため、家には入って来ない。だから、夜中は外に出ず、夜なべ仕事なども一切せず、ひっそりとももって過ごしたものだそうです。つまり、この日は忌みごもりの日でもあったのです。

このように、“春先に鬼がやって来る”という行事は、実は全国各地にみられるもので、何も秋田のナマハゲだけに限ったことではなく、わが国に特有な文化のひとつといってもよいでしょう。枯渇した冬から芽吹きはじめる春先に向けては、ひとつ間違えば喰い殺されてしまうような、何か得体の知れない恐ろしいものが必ず徘徊(はいかい)する、そういう期間・期日がまずあって、そしてそののち、いよいよ春はやって来るとされていたのです。

《詳しくは…》

* 『野田市民俗調査報告書』1～6号 野田市 各「年中行事」の章参照

①節分の豆まき(鬼やらい)(2月3日頃)



②初午のお供えものにするスミツカレには
鬼打ち豆を入れる



③出来上がったスミツカレ



④スミツカレと小豆飯をワラットに詰める



⑤ワラットをお稲荷様に供える



(撮影協力 船形・染谷正雄家)